

2018  
秀作

## 第51回「おかねの作文」コンクール

# 500円玉の重み

静岡県・沼津市立今沢中学校 3年 村上 陽風

私は500円玉が大好きだ。小銭とは思えない迫力。お財布にあるだけで感じる安心感。ピカピカの500円玉は宝石にさえ見える。私は500円玉に一目置いている。

母の話によれば、幼稚園時代の私は1円玉が大好きだった。お財布にぎっしり1円玉を入れて大金持ちだと思っていた。とにかくキラキラしたお金が好きだった。買い物に付いて行くたび、レジでありったけの1円玉を出しては、「すごいね、お金持ちだね。」

と、レジの人に言ってもらうことを喜んでいた。

それが小学校に上がると、あんなに好きだった1円玉の弱さを知る。1円玉を99枚持っているより100円玉を1枚持っている方が強いということだ。「世の中に100円で買えないものはないんじゃないか。」

とさえ思っていたくらいだ。

100円玉が好きな時代がだいぶ長く続いた頃、肩たたきのご褒美に祖母が500円玉をくれた。気にはなっていた500円玉を手にした時、自分が大人にでもなったような気がした。そして中学生になった今では財布にお札が入ることも増えてきた。

自分が成長する過程でお金にまつわる色々なことを知った。“お金の種類”では、1万円が一番大きいお金だと知った。“金額設定”とは、この商品は大体いくら位かの相場のようなものであることも知った。この店よりあっちの店のが安いといった“価格比較”のようなことも知り、得することも楽しんだ。詳しくは分からないが、小切手や株などにお金と同じ価値があることも知った。お金を稼ぐ大変さやありがたみも知った。

お金の価値を知った方がいいと我が家は小学校に入学するタイミングでおこづかい制になる。私は毎月おこづかいを無計画に使い、妹は計画的に使う。妹

は残ったおこづかいを郵便局に貯金しに行ったりする。もちろん私は貯金の仕方など知らない。

妹が小学校1年生の5月、父と妹と私で母の日のプレゼントを買いに行った。おこづかい制も始まったばかりなのに、妹は4月にもらったおこづかいを使わずに取っておき、プラス肩もみや風呂洗いでもらった全財産を持って出かけた。私は財布も持たずに出かけた。

妹は前から決めていた200円のボールペンを買った。私もかわいいマグカップを見つけたので父の所へ行き、  
「これに決めた。お金ちょうだい。」  
と言った。すると父はお見通しのような顔で、  
「妻の日じゃなくて母の日だ。身の丈<sup>たけ</sup>に合ったプレゼントをしなさい。」  
と言ってお金を出してはくれなかった。こうなると頼れるのは妹しかない。私は妹に、

「500円貸して。」

と言った。妹は

「足りなかったの？ちゃんと返してくれる？」

と言ってきた。何となく嫌がる妹からどうにか500円玉を借りて、私は母にマグカップを買った。妹より高いものを買うことで勝ったような気がしていた。

そして母の日。母は私達からのプレゼントに大喜びした。妹は喜ぶ母を見てとても嬉し<sup>うれ</sup>そうだったが、私は妹のようには見られなかった。妹からお金を借りたことや、それでプレゼントを買ったことが急に恥ずかしくなってしまったからだ。父も私が妹にお金を借りたことは分かっているし、母ももしかしたら分かっているのかもしれない。そんなことを思うと何とも居心地の悪い母の日だったことをよく覚えている。

あれから5年経った今も、母の日が来るたびに話が出る。妹が一生懸命貯めた500円を私が簡単に借りてしまったこと。妹は貸すのが本当に嫌だったこと。お金を借りた私も、貸してくれた妹も嫌な思い出の方が強く残っている。

中学生になった今なら分かることは、父が言った“身の丈に合った金銭感覚が大切だ”ということだ。お金がなければ感謝の手紙を書けば良かった。お手伝いをプレゼントにすれば良かった。折り紙のカーネーションでもきっと喜ん

でくれただろう。今ならたくさん思いつくお金をかけないプレゼントも、残念ながら当時の私には思いつかなかった。

お金の価値観は人それぞれ違うとは思いますが、きっと私はこれから先も500円玉を見るたびに身が引き締まるのだと思う。決して大きな額ではないが自分の襟えりを正してくれる。そういう意味でも、私はこれからも500円玉が大好きで、一目置いていくのだと思う。

